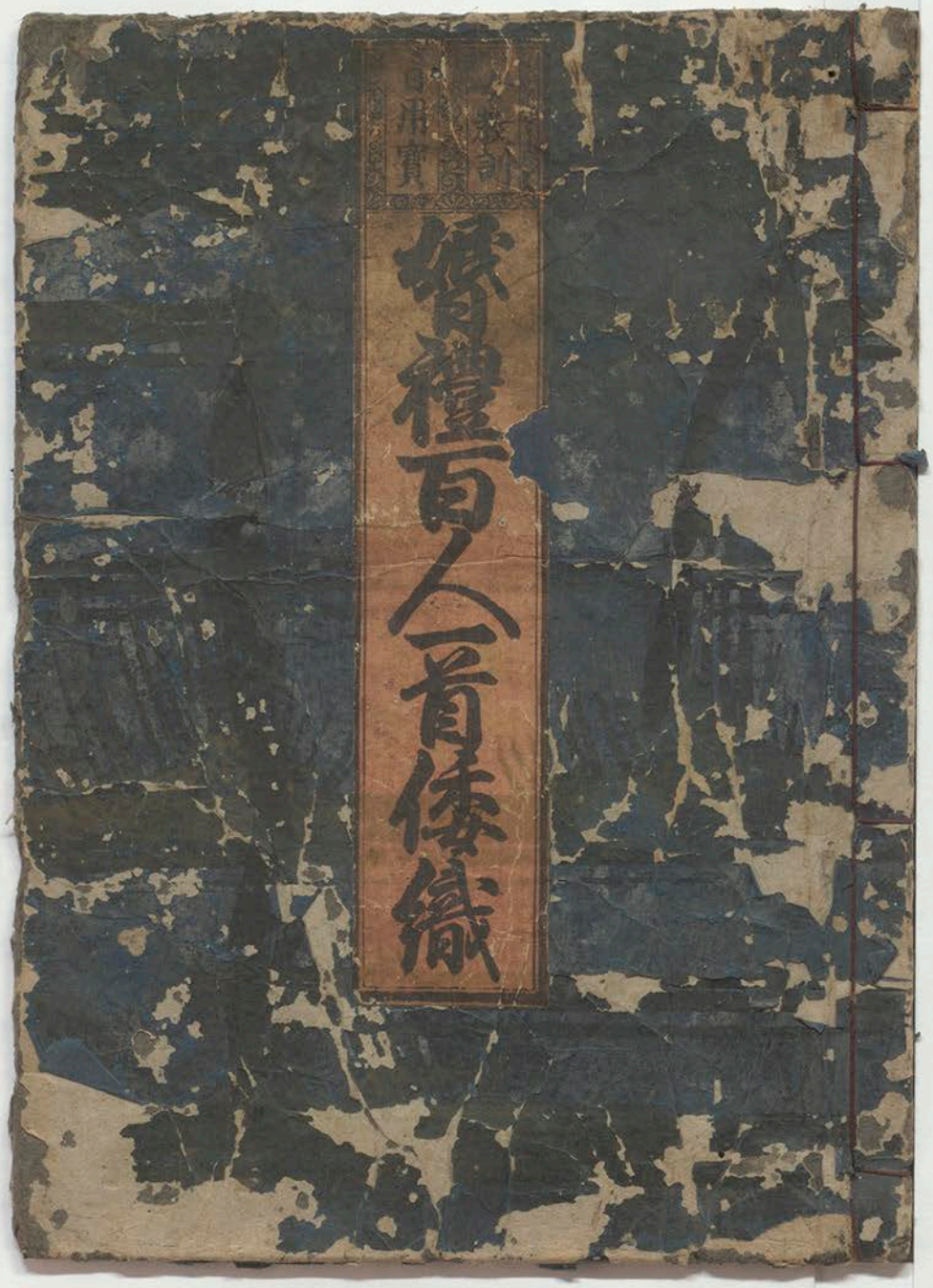
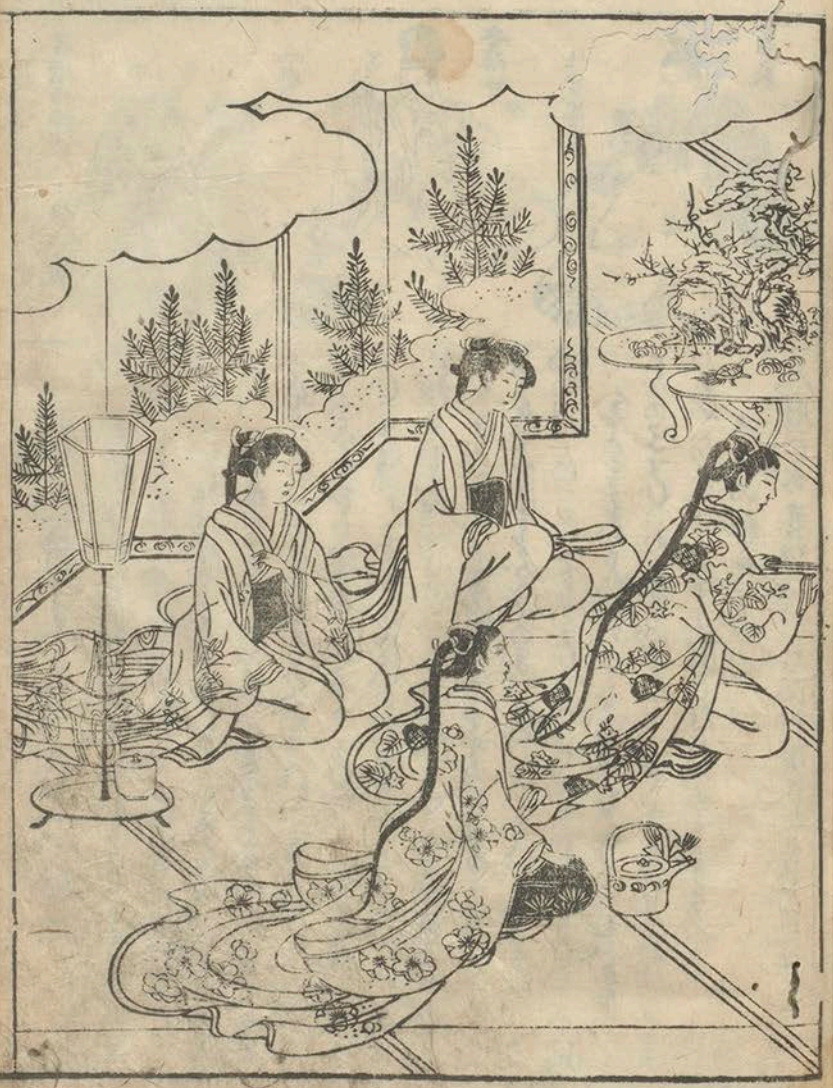

教訓
日用寶
儀禮百人一首俤織

婚禮百人一首倭織

目録

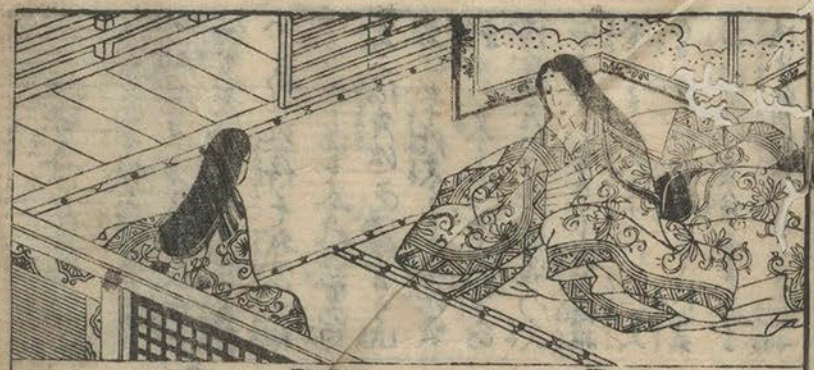
伊勢系文倭姫伝記
和漢賢女鑑
産帯祝鑑
婦人諸教訓
京女帝紀
新撰六十乃説
男女相性鑑絵抄
万葉花の秘伝
茶道花の秘伝
婦人諸病妙薬
婦人日用日取の事
不成就目

十二月大和玄素



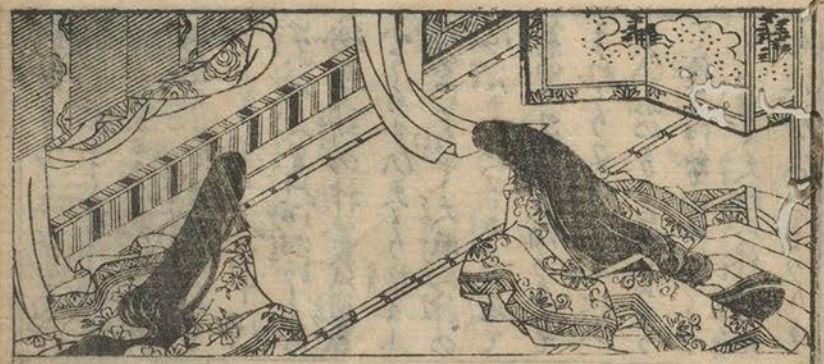
百人一首よみくせ　天智の秘訣

百人一首ひやくにんいしゅ　天智天皇てんちてんのう　喜撰法師きせんほうし　安倍仲麿あべのなかまろ　壬生忠峯みぶのただみね　宮家みやけ



○伊勢斎宮倭姫傳記

本文我日の本は天照大神の御子孫にて始人の主とゝなり給ひ
伊勢の内宮に御鎮座ましまして天照皇大神宮と
いつきまつり給ひて我国の元祖
なり給ひ人皇十代崇神天皇の御代
文武両道を兼備給ひ
文武両道を兼備給ひ
御代の文武の
御代の文武の
御代の文武の
御代の文武の



山辺赤人

田子の浦に
うち出でて
見れば
白妙の
富士の
高嶺に
雪は降りつつ

猿丸太夫

奥山に
紅葉踏み
分け
鳴く鹿の
声聞く
時ぞ
秋は
悲しき

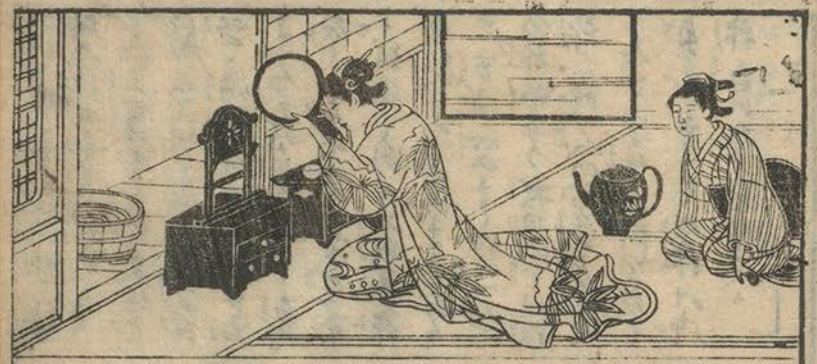
中納言家持

鶯のこゑ
はつせ
をく
霞乃
ちろき
ふしば
取ろ
立ふ

安部仲麿

あまのゝ
ゝさけ
ふれば
かすの
みかさ
みえ
いま
月ゝ

五十鈴川くるぐるくるくるとまわる五十鈴
の川上は遠き事なれども
一時は河流めして後姫命
清水の齊けるれうとそ濯
ひものとりうらう清水濯川と
いつて後姫命世紀ゑらくう
新古今
前中納言匡房
君代久しかるべしとひや
ぶれ五十鈴の川の流をくみて
新千載
荒木田守藤
水上ふるき神路のとぐちも
ながれてけるくるとそ思ふ大神
ひとりおはします伊勢湯修繕冊



蟬丸
あまもこの
紙も
人れを
ワラ紙てい
ちれもしぬを
あしさらの実

和漢賢女鑑
秦織貫
和田のえう
いせ
海

僧正遍昭

天つ風雲の
かよひぢ
吹とぢよ
をとめの
すがたしばしとどめむ

陽成院

筑紫なる
おきつ
しらなみ
立ちかへり
なほ
なごりあり
と
思へば

河原左大臣

みちのくに
あるかとぞ
みる
塩がまの
うらこぎ
出でし
あまの
釣舟

光孝天皇

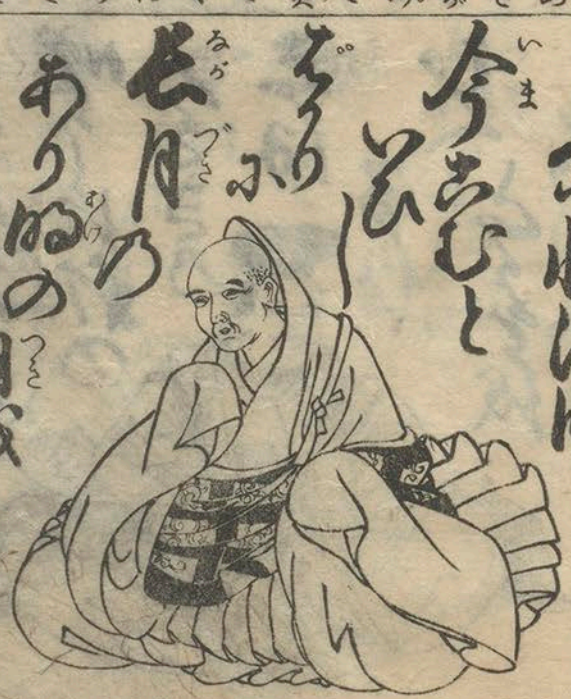
君がため
春の野に
出でて
若菜つむ
我衣手に
雪は
降りける

中納言行平
立わかれ
いなばの
山の
みねに
おふる
まつとしきけば
今かへりこん
在原業平朝臣
千早振
神代も
きかず
たつた川
からくれなゐに
水くくるとは

藤原敦行朝臣
住の江の
きしみ
よるなる
さゝやの
夢乃かよひち
人めよくらん
伊勢
難波がた
みじかき
あしの
ふしまも
あらぬ
この
よを
すごして
よるや

元良親王

素性法師



文屋康秀
吹こしに秋の
草木しをれば
むべ山かぜを
あらしといふらん
大江千里
月見れば
ちぢに
物こそ
かなしけれ
我ひとの身ひとつの
秋にはあらねど

三條右大臣
名のしかりて
あふさかやまの
ちかみち
人よりはやく
ゆきもあれ

菅家
おのがえだを
ぬさとも
とりあへず
手向山
もみぢぬのきに
神のまにまに

○産業秘鑑

貞信公

小倉山

ふもとの

みぢ

紅葉

ゆかば

今一度

帰幸きたん

中納言兼輔

見わたせば

花も

もみぢも

なかりけり

いはみ川

ゆふぎり

そこ

ひかるらん

太二未ぶみてりぐさ
けりそて玉べし情ぶるる
そ後の四うくべしと
ふ玉べ情ぶるそ八そ
九つと芒を玉べし情ぶる
らん芒のつ八ようし

一情脇十月名稱の事

一初月　そ春ぶ
名栗初て情ぶ
一弟二月月　そ春ぶ
不空名をるかし
花の咲ら後が
一弟三月月　桃の花ぶ
たらけ

源家平朝臣

ふさは
ひびさ
ぬさり
ある
人めを
まも
四月あ
ぶり人い

一弟四月月　血豚そのひ男
女のくらをさしむの花
姫ぶそ
一弟五月月　武徳とのう男
女のまりりく梅と月
いくこ帯しる帯ふ赤白二
筋ぶ赤ふ
たの神ぶう女の右ぶ神人へ

九河四行姫

ふくふ
ぶんや
神君の
をたまを
ちまぶる
ちまぶれ

吉日と云て三むかしの
大こやの日中限 ろうおさん
ひろく 山日ろうろ
一才六月目 又撓潮ひ六の
稽古ごとむ元服を吉年とて
才一人食初ろ家を祝へ
一才七月目 又撓六稽古
のひ泥ろうろ眼人見ひき
給胄水流を
一才八月目 きをとろの
ひろ人を生ど
一才九月目 ろ人を吉日
肉を生ど後関ゆて母の人ゑる
を乳時を小人年と大切
みをろ
一才十月目 ちろくく潮ひ

壬生忠岑
富のはを
ろく
ろ
れ
ろり
わろさ
ろを
ろきわいれ

りろくの紙林のろろ
をろろて生をでんろく
ちんくそ潮を待べ
枝年春してんどいろん
やろ年一ろろく
くけろしひ

坂上是則
名ろ春
みろ月の
月や
みた
そふ
ろけさん
あれるろ雪

▲産前産後に用ゆる薬

一益母草　一味

右一味とこんぜんぐさ益母草を用ひ煎じてんかに用ゆ

▲難産に用ゆる薬

一薏苡仁　一味

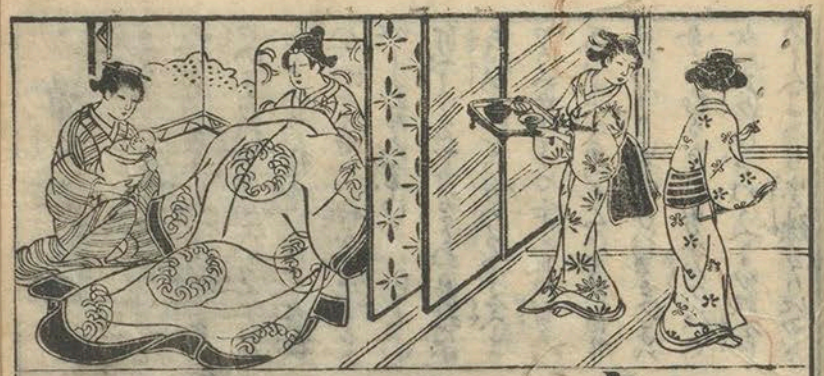
右を粉末にして白米こなりで用ゆべし

産前産後秘伝終

春道列樹

山川に風のかけたるは

みなくれなゐにあらぬなりけり



紀友則

久かたの

ひかりの

のどけ

き

春の日に

しづこころ

なく

花のちるらん

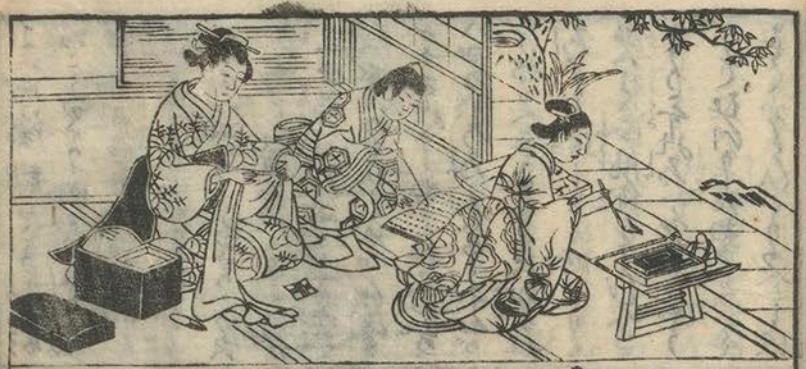
○婦人諸教訓

菅原其風

雅をうとしまれ人うきむ高砂の松もむかしの友なるよ

紀貫之

人をいざ
こゝろも
知る人は
花ぞ
むかしの
香ぞ
ふるさと



清原深養父

夏の夜は
まだ宵
ながら
明るを
雲のいづこ
月やどる
らむ

文屋朝康

白露に
風の
吹しく
秋の野に
つらぬき
とめぬ
玉ぞ散る

右近
左近
右近
左近
人の恋
わすれがたし
参議等
あさぢふの
をの
のゝ
篠のめ
なれそ
人のあひき

○京女帝詞せ

すべく女中なるめのもち
ゐる物をすべてうんじけ
ることやちやにてづくまま
第一のこゝろあるべき事
女房の詞をあまりたづる
父をたゝちをゝとりとる
母をたゝちをゝかゝとる
男子を　ぼうとしいう
女子を　おごつきといふ
門番を　ちくなといふ
そうしをそうしといふ
おこそをおこそといふ

十五夜を　まん月とて
十六夜を　いざよひとて
あくるを　いまとて
いりぬを　いねとて
ふるひを　ふりとて
夜のあけを　あけぬとて

清原元輔

契きれ　袖と
ちぎりし
末のまつ山
なみこしなん

中納言敦忠

あひみての
後の心に
くらべては
むかしは
物も
なかりけり

謙德公
春をいとへき人とも
なれとも
身のいとまなりねをたうる

中納言朝忠
あふ事の
たえてしなくは
中々に
人をも身をも
うらみしらまし

○女中相生の六番

▲木性
富士文比丘尼
如意万年

▲火性
迦計庫兼高吉
菊康匡光久元

▲土性
朝里竹貞隆藤
長六重治傳

▲金性
遠阿頂永姫安
虎一ゐる英邑備

▲水性

夢孫姫忠
ゆめのまつ
ゆ
ゆ
ゆ

春時秋節勝十
杠正政清村之

右の名ぢくしん額後を
りして考ふる字なりうん
本性の人の名は水性の
文字なるゆへ水生木を
おもみて文字を火性の人
本性の文字木生火を用
ひた性の人は火生土の
文字を用ひ金性は土性
の文字水性は金性の
文字を用ひへ金生水の
おもみて文字なるべし

源重之

風をいたみ
岩うつ
波の
おのれくだけて
物をおもふ人にぞ有

大中臣能宣朝臣

御垣守
衛士の
たく火よ
昼は
きえつつ
ものをこそ
おもへ

新撰六十圖

江戸仙撰

子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
火	火	木	木	水	水	金	金	火	火	木	木
土	土	金	金	火	火	水	水	土	土	金	金
木	木	水	水	土	土	火	火	木	木	水	水
金	金	火	火	木	木	土	土	金	金	火	火
水	水	土	土	金	金	木	木	水	水	土	土

四十六十の器八十年の名と
なりあらくくるまの人生八十歳
生まれ年の名と行ひ年の行
性とまりくりかえす人安
永元年の人年ひとり行人
くりそ十五才八人名をとる
まの人ひとりくりそ十六まあ
くる年八月のこれ夜の年にそ
なまりの人金性とまりかぶ
あくくりそてその年くりく
西方ぶくぐは丑の年八月を
いりの人とびてこと様をとと行人
くりてこれ水の西方ぶ八上
の性の丑の人くりくりびその
きとと行人くりくんりと行十行の日
丑も右の西方そ知ること

男女相生鑑

○男本　女火

本性ニ火ヲ生ジテ木ヲ生ズ人あり初めてうまれしとき
のちをとりうりねしとき
いのちをとりうりひやりんを
ぬりたるべし
いのちへのつるぎ社の
ひとひとそ
とつかうこうの
こんぜたのしき

○男本　女土

そうぢやんよりのつるぎ
ほこうへあるとこもひんぬかよ
ちりよりすあり社とちんぐ
してう
たのしき社くまさ
かんとうりへども
こをを祝ぎ
わ祝ぎうの

○男本　女本
命も久家
儀同三司母
○男本　女金
大納言公任
滝乃音は
絶て
久しくなれど
名こそ
流れて
なほ聞えけれ

○男女　女水
和泉式部
あらばこそ
この世はて
なかるべ
なひ
今をこそ
なげくも
○男女　女土
紫式部
めくりあひて
みしやそ
とも
わかぬ
まに
雲がくれ
月の
かたぶく

○男女　女女
大武二位
有る山
いかの
けが
風ふかば
つぐろう山と
ますらをの
○男女　女女
赤染衛門
屋すりつぐ
稲むしろ
ねをば
けよ
ひとつ
ひとつ
月の
入る

○男金　女本
伊勢大神宮
小式部内侍
○男金　女火

○男金　女水
清水観音
秋をこめて
名乃
たち花の
けるも
ふかしさらの
笑ゆきし
○男金　女土
左京之亮雅
今いまと
ひとえ
ぐるま
人ぐるまで
ゆきもする

○男士　女水
相模

○男土　女木
茶大僧正行基
○男水　女水
周防内侍
春の秋乃
夏ゆふ
冬ねん

○男水　女火
三源院
世の中に
○男水　女木
紙園法師

○男水　女土
良遍法師
○男火　女金
大納言經信

○男士　女士
ころもを
わしも
紬の
かみしも
あるこそ
とは乃
そうしの
あにきく
神子門祝之家紀伊
○男士　女水
花中納言直房
高砂
おの乃
ちくら
嶋よ
りや
まの
まつも
あるん

○男土　女金

たきふまーるみんわう
でんだーくにつけてこゝゆ
かるみれかとまろーぐー
ぐんろーぐーくはくた
あるとてちゝ中に
らたそ
はろろーぐーのるくと
ちとんだ

源後朝臣
うりあ
人を
ろを
乃
山
ゆろー
ちげーう秋こい
いのーねねを

○美濃ねの秘伝

▲すーこけふいーと粉よ
してゆーこれそふいろ
すーーろ(二人塗てよ
▲きちんいりかるみ
けうそ二人をゆこと
れけ　よゆうぐんがーへ

藤原基後
歌を
さ世
りが
歌と
命そ
あれたこの
秋をいねり

又一つんをめてよ

▲ぶっこんハトみっこんを
こゝろこゝろにとゝろとゝろと
ゑムすくしてめっぐんゲー
くゝくそ先くくよ

▲爰ちこハあゝ〇みむちゃく
このあくこかこぐろをこ
ますせ波る

▲ぐすす後ゝくこちゝちゝすび
ゲまのかゝをやきすこ色
むちゝちにてすちゝゝ
とにくく深べーかすにさ
るはまこと波くー

▲ちゝ素なくこもそ足ん
そめゝちゝよにがしゝ〇ゝ
ちん入る

おそろし
ものよ
久
れば
あだ生く
もこのゝ
法眼等入道前関白太政大臣

▲あゝ〇そめゝあゝ〇にゆゝん
ゲーへてこゝん深ゝちゝふゝゝを
やゝゝゲんゲ波てゝちゝくゝる

▲こひにちゝにゝゝくゝにてこゝん
深ゝふゝ出ゝゲ〇をまゼニ
こゝんゝちゝくゝちゝふゝゝん
をゝよ波こゝくゝそゝる

▲こゝんぎゝ花ゝちゝにこゝゝ
やゝめゝうゝぐんゝちゝく波ゝ

▲ゝにゝ素ゝゝくゝ出ゝゝけゝ
ゝくゝぐんにゝゲ〇ゝゝ
入くくそゝるなゝ

▲ゝゝこゝにゝゝゝ波をゝゝに
ゝちゝちゝそゝ中ゝちゝゝゝあゝ〇
ゝてこゝんゝちゝゝゝこゝゝ
をゝゝ〇ゝくこゝんゝゝ

宗德院
涙をくやゝ
出ゝよ
世ゝゝ
淀川の
ながれても
すゝ
あゝ
をゝ
ゝゝゝ

まさきをあらひにぶ
ぐしこしらへ八一人をちよ
れこゝあらひちやくをの
あくをそそろくよう
▲さてだいこ稼のせんど
やうこんせんこれ又十
月よりをみよりを又合
八八合こせんどつゐ出れ
をつゐちやくよう
▲さぐこちやのそろへ
りかとれちやくそ一石
んこをさて中そろと
りかとのをるに先ち
なんすしわう稼を
一合入くそろ

源兼昌
淡路潟
かよふ
ちどりの
なくこゑに
いく夜ねざめぬ
すまの関守

左京太夫顕輔
秋風に
たなびく
雲の
たえ間
より
もれ出る
月の
影のさやけさ

○ある方のおくり物

▲小袖一重の物語りー

白あやのことばにて綴りたる

そうるひのみそりこえ

よのなかをそこ一角をそこにい

さると天角こくりてあるゆ

の中へまをあを来ーうちへ

でんこあのあらはれ入るをん

をそこふもれたるをそこをおもふ

へこうらを有ぞー

▲衣おるは血の有るハ打ぬよ

くのかー入ちみ有るまをの名ホ

おちこーまをこーをこよるが来

しそまこ三ホ海のこえれ硯

かりくこーのこと有こ

ねをこそこ

けさは

みだれて

くろかこの

かもたれば

おりらを

待賢門院堀川

▲白さあれの紙のちこるよハ

りみだりゆそあらーぞー

▲ちこをこれ行ーてもあれの

ゆるるいとこれゆをぞ

▲こるーみ有るハこをの有そ

あらーぞー

▲白さあ神ハ紙をふ墨

の有るハ上下に紙をあた

やーみこをふあをはまそ

て時ハ紙をうる紙を

をうくれそー

▲こをもこちあれけつき

こるハ梅の部そすぐし

梅部こをこれ時梅のあと

をふむをこ日あくりてあた

ハ用の時あ小部こーあけで

法德寺九条

部こ有ハ

こをこ

ぞ

ちこ

ハ

なる

むしば

をこ

ぞ有ハ

月そのこ花ぞ

道園法師
おしひる花
命は
あるもの
うきこゝろ
なるべし
豊臣秀吉公後世
世の中よ
さてさて
おしひる
山のおくゆも
深うなくなる

▲ちゝふ油の付さるいとうしのもちはくたくこと

▲ちゝぶの付さるいとうしんをはんしあらはすかつをぶしをはんわらはすかつをぶしをはんそはらはすかつおさのはくはてあらふ

▲ちゝのもち付さるまいぶまろみめりはてあらふべし

▲ちゝぐろの付さるまいぶ米はかりはんしはらふべし

▲あへものはれ血油の付さるまいぶ毒のけまてあらふべし

▲あへのわちまさまろ石灰あらうてあまびあつる

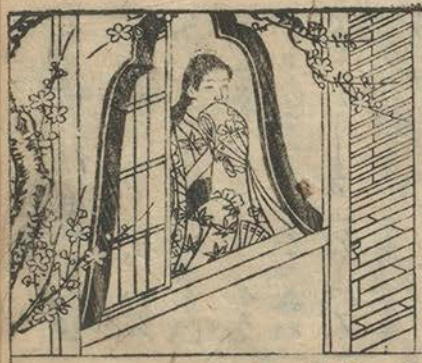
▲漆漆をかまにはあてはまいあつる

蔵本法師胡桃

ちゝふ人べ
まと
はこころや
思
これを
ふ此みゝ世を
今はあひ歩

▲血の付さるゆをやうどうすぐ
よふおけ血うつてもつる白さ
わ付さるゆをやうどあし捨べ

▲墨付さるはつてみゝ中あら
ひて小型小町の寸
まりはくはるとたゝこ浮美
うれはくはひぶーん
右こ面んふゆもぶ義こ



俊恵法師

秋すゝ
物そ人
こゝろい
明ゆで
園のひまさ
はとかうをゝり

○婦人法師の茶番

そもそも女中ハ男とちがひ人
みをかくしまゆ髪ひ
ゝるゝとれしゝをも
おりひとづひのちゐい
今ハもうしるハはれ大
るゝよ法ものうまびを
法師はゆ髪方をわしまし
ふちろしぬ

▲髪めるゆ桐ゆ桐
様の髪をゆにゝしびん
ゝるはゆ髪めるゆ

▲向髪をそゆるゆ髪
を那ゆそせんしゝゆにゝ
はるふべし又方をざろ

西行法師

おもしろう
月やハ
ゝめを
なりはるる
かゝちゝそかる
わのゝゝるる

の陰をせんしゝゆにゝふは
ゝひくゝ

▲かゝのやまひゆ白髪
をゆるゆしゝはゝまバ
ゝゝのゝゝゝくゝやまひ
かゝるゝまるまゝゝゝ

▲かゝゝゝゝゝゝを形ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

寒蓮法師

むゝさあれ
病も
まゝ
びね
桂の孫
寿ゝちのる
秋はゝれ

▲あぜかの茶うす 輪貝を
▲ふるひの茶
▲ちとこれれとそそ
又六月六日十六日廿六日
武子図親王
玉の枝よそこなべ
ねるこの
よりもそ
をれ

▲ひぐれ茶　あさくさ茶をみつけをつけてしゑ
ゑ〜かこの茶にくわらひてゝ
▲さゝめこぎれこゝろ
ぶんぞう　ふ金　ふ月ろ　ふ五
白ぶし　一ふ　白ぶし　一ふ
白ぶし　一ふ　耳松　一ふ
ゑろのふ　二ふ
右七味を好みて
ふめりてよ
▲こぎれこゝろ
いぎゝひんらうど
ゝろや　ゝろぶん
ゝみゆめり付へ
▲ゝゝろのゝゝ

ゝゝこぎれのゝろやゝを
付ゝて　めなゝ
▲なゝすずのゝゝゝ
いゝゝゝ大　ゝゝゝ大
ゝゝゝ　ゝゝゝ中
大ゝゝゝあのゝきゆゝく
あらひてよ
▲ゝゝゝれゝゝむゝゝ

きくみどろうえをとくとつてあげゆふかさたてあらうべー

▲まへみるのもたよいだやーやーー　ゆうぐん

右二味こうぶんかせんーわーひてえ倍ふめうぐん

の粉をまぜてねりけてーー　又吉仁を度よ

やきあつさ付絞ふつてゆきてよ入てよー

▲まへ切て二葉わきあ

昆茶茱萸まあ粉をまぜて

絞のうろへ入てよー

▲まへよやさ出るよい

いようと粉まぜて付べー

かくるーまも

人こそ

神のたの

ゆえ

ちはひ

紙袖い

二條院讃岐

又ものの粉をとろうまこと

つくく入くくよー

▲まへのゆずまいぐるよい

石灰とおんじおく法そよー

おようと粉ふーひ粉ろうけよ

▲ーーーつと薄の茶

ちのろのはをとろ西紙ふ

てゆゆて付てよー

源俊頼朝臣

世の中は

つねにも

がなと

なる

渚こぐ

あまのをぶね

はるばる

みるかな

○婦人日用日取仕事

▲預成就日（八日神仏一切）

正月 ね　二月 う　三月 ま　四月 い
五月 み　六月 む　七月 ひ　八月 ね
九月 ね　十月 ひつじ
十一月 う　十二月 う

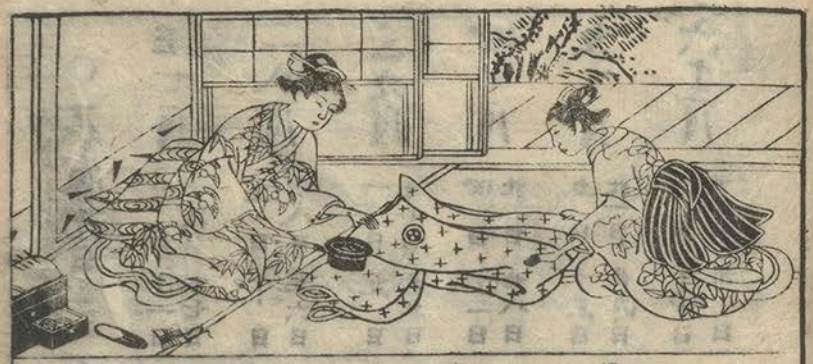
▲衣服たちそめる日

正月 ひつじ　二月 う
三月 ね　四月 ま
五月 いぬ　六月 い
七月 ひつじ　八月 い
九月 ね　十月 ま
十一月 ねず　十二月 いぬ

▲新年衣裳者向方
春 ろの方 夏 いぬの方
秋 いぬの方 冬 うしの方

▲衣服をたつ日
つちのと巳 ひのえね日
男ろもの ろのべ〜ぶ
きのえさる日 女ろもの
たつ ぶ 女月れさ
ようある時 ものうちを
ぶ〜ず

▲いそぎ衣服ろ時
たつ ぶ あ れのえひを
えらめうちて
八日も時しきりの
右ろ衣をこだんぶ



○不成就日

正七月	三日 十一日 十九日 廿七日	
二八月	二日 十日 十八日 廿六日	
三九月	一日 九日 十七日 廿五日	
四十月	四日 十二日 廿日 廿八日	
五十一月	五日 十三日 廿一日 廿九日	
六十二月	六日 十四日 廿二日 廿八日	

正三位藤原
風雅なる
小川の
ゆゑ紙ハ
みちたり裏れ
ありなる

後鳥羽院
人をたに
ひとつも
めし
あちきなく
世をなげゆゑ
物そなげハ

跡見学園女子大学短期大学部図書館
☎03(3943)1368
1001933009

○十二月大和言葉

正月　霞初月　睦月
二月　梅見月　衣更着
三月　花見月　弥生
四月　花咲月　卯月
五月　立夏月　早月
六月　皆夏月　水無月
七月　七夕月　文月
八月　月見月　中秋
九月　菊月　長月
十月　神無月　神在月
十一月　霜月　神楽月
十二月　師走月　乙月

順德院

百敷や
古き軒端の
忍草
しのぶるも
なほあまりある
むかしなりけり

女遊學探鏡　百人首女用教章　婚礼の儀式女教訓秘伝の巻　女中日用名寶ならびに事と不識載る書なり

女萬葉福壽海　百人首女訓の素其の女中日用名寶ならびに事と不識載る書なり

女訓蒙探大全　百人首四季のみちくさ　其の女中の名寶の事と素事を集む

婚禮百人首俵織　百人一首其の女中教訓なる事寶ならびに事を集めたり

書畫　洛西双岡　下河邊拾水子

彫刻　石原半兵衛

天明七丁未年五月吉日

京都書林　寺町通松原上ル町　菊屋七郎兵衛板

○十二月人和言葉

正月 霞初月　睦月
二月 梅見月　衣更着
三月 花見月　弥生
四月 花咲月　卯月
五月 立夏月　早月
六月 青葉月　水無月
七月 七夕月　文月
八月 月見月　中秋
九月 菊月　長月
十月 神無月　時雨月
十一月 霜月　神来月
十二月 去年月　乙月

順徳院

百敷や
古き軒端の
忍草
しのぶもいかに
あまりなるかな

女遊學探鏡　百人一首女用教草　婚礼の儀式女教訓秘伝真名女中日用名寶ならびに年中行事を記載せる絵入本

女萬葉福壽海　百人一首女訓文素真名女中日用年寶記と水茎と不淫載せる書なり

女訓蒙探大全　百人一首四季の文化くーー景女中の名寶の事と素書を集む

婚禮百人一首傳織　百人一首真名女中教訓なるを書寶ならびに年寶を集めるなり

書畫　洛西双岡　下河邊拾水子

彫刻　石原半兵衛

天明七丁未年五月吉日

京都書林　寺町通松原上ル町　菊屋七郎兵衛板